

ぼくから山盛りのありがとうを

阿部 功希

のどがつまって言葉が一つも出てこない。今こそ、たくさんありがとうを伝えなくちゃいけないのに。

ろうかが氷のように冷え冷えた。昨年さくねんの十二月じゅうごう、朝早くあさはやに電話でんわが鳴った。岩手いわてに住すんでいる曾祖母そそう、ハナさんが天国てんごくへ旅立たびだったという悲かなしい知らせだった。遠く離はなれた群馬ぐんまに住すんでいるぼくたちは、毎年まいとし夏休なつやすみみに会いに行くのをとても楽しみにしていた。

「遠いところ来てくれてありがとう。」

山盛やまももりの、塩しおがきいた大きなまん丸まるのおいしいおにぎりとつけものを用意よういして待まちっていた。目の前の緑色みどりいろの田んぼがさわさわとゆれるのを見ながら、おにぎりを食たべて、学校がっこうのことや友達ともだちのこと、色々いろいろと話はなした。そして必ずかならず言いわれる大切なこと、

「どんな時ときでも、あいさつと感謝かんしやを忘わすれないこと。相手あいてとけんかしていても、ありがとうは相手あいてを見てきちんと言いうこと。大切たいせつだから大人おとなになっても忘わすれないでね。」

毎年まいとしくり返かえしくり返かえし言いわれた。ハナさんは、ありがとうもおにぎりも山盛やまももりだった。会いに来てくれてありがとう、学校がっこうのことたくさん教おしえてくれてありがとう、おいしそうに食たべてくれてありがとう、お花はなくれてありがとう。にっこり笑顔えが顔おのハナさんが言いってくれるあり

がとうは、岩手のなまりでとうの音が下がる。それがぼくにはとてもやわらかく聞こえた。

新幹線から降りると、岩手は雪がたくさんつもっていた。ハナさんの家に着くと、いつものにつこりの笑顔も、山盛りのおにぎりつつけものもなくて、みんなの涙もカチカチに凍りそうなほどにさむかった。

お別れの時、泣かないで見送ろう、今こそ山盛りのありがとうをハナさんの顔を見てきちんと言おうと思った。おいしいおにぎりつつけものを作ってくれたこと、笑顔で話を聞いてくれたこと、離れていてもいつも応援してくれたこと。ぼくは花を入れながら言おうとした。でも、のどがつかまって言葉が一つも出てこない。ぼくのありがとうの山盛りが一気に押しよせてきて、のどの所で混んでいる。何か言おうとして口を開いてもぎゅーという、変な音が出てくるだけだった。祖父や母は、

「だいじょうぶ、伝わっていると思うよ。」

と言ってくれたけど、ぼくの山盛りのありがとうは、ちゃんとした音になってのどから出てきてくれなかつた。

だからぼくは思った。今後、ぼくは色々な場面で感謝の気持ちを引きちんと伝えたい。小さな事でも心をこめて。音にならなくても、伝わることもあるけれど、ハナさんがいつぱい言ってくれたありがとうは、ぼくの記憶の中で思い出すたびふんわりとひびく。だから、ぼくもハナさんのようにたくさんの人たちに向けて山盛りのありがとうを伝えて行こうと思う。